居るから改めて主務大臣の認可を享ける必要としないのである。以上

木曾路（一）

牧田修

はしがき

一

藤村の最近の大著「夜明け前」は、茲に取り立てゝ、説明するまでもなく、餘りにも有名である。しかし、そのあらましをいふなら、木曾路十一宿の一つである「馬籠」宿の本陣の當主吉左衞門、その跡繼半藏といふ二人の人物を中心にして、木曾路の生活を書いたものである。時代は幕末から明治維新にかけての、世層の險惡なるときで、人の心持ちの上にも、落つきのない、あわたゞしきものがあり。街道を往來するものも、その氣持を反映して、わけもなく、いらいらした旅をした樣を、描いてゐる。

わたくしは、「夜明け前」を讀んで、木曾路の生活を、興味多きものに思つた。とりわけ、街道に於ける模樣に、興味があつた。本陣の模樣とか、助郷の狀況とか、街道修理の方法とか、道路上の出來ごとゝか、かやうなことが具體的に、描寫せられてゐた。わたくしは、「夜明け前」を生きた木曾街道交通史だと思つて、讀んで行つたのである。

讀了してからは、馬籠あたりから、木曾福島あたりまで歩いて見たくなつた。そして、機會の來るのを、久しい間心持ちにしてゐた。そのうちに、二度ほど機會に惠れた。一度は癡覺を一寸見ることが出來た。それは、ほんとうに一寸で、もしかも夜になつてからであつたから提灯の光りで、朧ろげな癡覺の姿を眺めたゞけであつた。今一度は、

今年の一月一日であつたが、上松に下車して木曾谷を福島まで自動車で走つたのである。そのときには、王瀧川も見たし、棧の名勝も見た。また木曾谷を中にした福島の町も見た。しかし、それだけであつた。あわたゞしく、自動車で走りながら、車窓から見たゞけである。目を皿のやうにして見たのだが、僅かの時間のことであつたから、見るからに寒そうな木曾谷から、膚を切るやうな風が吹いて、白いものがちらほらして、山膚には雪が白くて、冬木立が、その中に立つてゐたことぐらひが、今わたくしの記憶にある。それで、まだ木曾路を知らないも同じだ。もう少し落ちついて、木曾路が歩いて見たいといふ氣持ちは、今日になつても、少しも變らないのである。

「夜明け前」が出た當時のことである。文藝春秋であつたと思ふが、作家としての藤村の言葉が載つたことがある。その中に、「夜明け前」の材料について、いろいろ苦心蒐集したといふやうなことが書いてあつた。わたくしは、「夜明け前」を先にも書いたやうに木曾路の交通史として、興味をもつて讀んだので、その材料が、何處にあつたものか、また閲覽が許されるものだらうか、こんなこと二三の點を藤村に問ふたことがある。その際藤村はわたくしに返事を呉れた。

安田正鷹様

拜呈舊冬は御手紙頂きながら何角多用にのみ日を送り且長い仕事の後にて疲れ易く暮して居りまして御返事越と思ひながら今日まで失禮いたしました。

御尋ねのこと中央公論誌上の「覺書」にもすこしばかり書いて置きましたから御覽下さつたことゝ思ひます。

拙作の參考史料として尾州德川家の蓬左文庫より借り受けしものもかなりありました、木曾王瀧村の松原氏古帳はその中でもかなりありました。木曾王瀧村の松原氏古帳はその中でも最も役に立ち福島宿諸帳の類も有益なものに思ひましたがこれらはさう長く手許にとゞめ置かずその都度蓬左文庫の方へ返しました。猶小生の家にふるくより殘存せる古文書のうち同文庫へ寄贈のかたちにて

保管を委托せしものもあり只今のところ木曾地方の古文書類はかなり豐富に同文庫に蒐集されて居ります。小生より同文庫に寄贈せしものの中には木曾谷御免檜物に關する古帳もあり又小生の母方の家に殘りし妻籠本陣日記、御年貢皆濟目錄等もあります。就いては德川林政史研究室に在勤する木曾出身の所三男君宛に只今御紹介の名刺を同封しますから同文庫につき御調べ下すつたら種々御參考になることも多からうと存じます。

蓬左文庫所藏のもの以外にも諸方より借りうけしものもいろ〳〵ありましたが例の大黑屋日記を除いてはあまり小生の役に立つたと申すほどのものも見當らず大黑屋日記三十一番はあづらしいものですが右は神坂村大脇氏の方へ返しました。追別舊名主の家にも參考になるものはかなり殘つて居りましてあれも借りうけて調べたことはありました右のやうな次第で自分手許にはわざわざ御めに懸けるほどのものもなく大概の參考書は追々と返したやうな次第で今日まで御返事の延引せし御詫かたがた右あらまし申上げます。

二月二十日　　島崎生

この手紙は、昭和十一年のもので、文中にあるやうに、德川林政史研究室所三男氏宛紹介の名刺も同封してあつた。わたくしは、藤村の行とゞいた取扱ひを非常に嬉しく思つた。そして、出來ることなら、なるべく速かに、所三男氏を訪ねて、蓬左文庫から、木曾路の交通史料を借りたいと思つたのであるが、考へて見ると、容易ならぬ仕事であることが判つた。第一古文書を讀みこなすといふことからが、容易でなさそうだし、苦心してどうにか讀んだにしても、大量の古文書のことであるから、たやすく讀了し得るとも思はれず、元來が興味から來たことで、そんな時間的の餘裕があるわけではなく、そんなことで、藤村には洵に濟まないやうではあるが、その儘になつてしまつた。濟まないことゝ謂へば、詳はしい返事を貰ひながら、未だにお禮の返事すら出してゐない。氣にかゝりながら、その機會を失してしまつたわけであるが、申譯なく思つてゐる。

とは、今もかはるところがないのである。

二

前書が長くなつてしまつた。木曾路の交通史を研究するには藤村が「夜明け前」に用ひた材料などは、非常に役に立つことゝ思はれるから、藤村がわたくしの手紙に、いろいろと説明して呉れた古文書類を、調べて行くことも、必要なことゝ思はれる。しかし、わたくしには、今これにとりかゝることも出來ないのだから、「夜明け前」から、逆に木曾路の交通史的材料を集めやうと思ひ立つたのである。

この方法は、古文書を調べることゝ併せ效果のあることゝ思はれる。藤村の家は、妻籠の本陣であつたから、父母や、祖父母から聞かされたり、幼年時代に於ける、いろいろの記憶があつたり、それに、いろいろ資料となるべきもの、例へば街道筋であるとか。建物であるとか、器具調度類であるとかが、失はれて行きつゝあるであらうが、未だ少くないと思はれる。かゝるものを材料にして「夜明け前」は出來たのであるから、古文書からは求むることの出來ないものがあらうと思はれるのである。尤もこれ等のもの、總てを、嚴格なる意味に於ける資料として、その價値を認めることも出來ないであらうが、源氏物語などが、平安朝時代の風俗習慣を知る上に、重要なるものであると同じやうに、「夜明け前」も、木曾路に於ける生きた交通史であると思はれる。わたくしは「夜明け前」をもつて、描寫せられたる木曾路の交通史だと思つてゐるのであるが、そう考へて來ると「夜明け前」を通讀すればよいわけである。しかし、それでは充分でない。生きた交通史からは、感情や活動の狀態やを知ることは出來るが、一つの纏つた知識を得ることは困難である。それで、止むを得ずこれを分解して、一つの資料に還元しこれを纏め上げなければならないのである。

わたくしは、かゝる必要から、「夜明け前」から、交通史的材料を摘み出そうと思つた。そしてこれを一つの計畫の下に、纏めて見やうと思つたのである。長いこと、わたくしはそれを考へてゐた。しかも、いろいろの事情があつて

それが出來ないでゐた。ところが、最近になつて、少し時間的に餘裕が出來たから、これに着手して見やうと思つたのだが、一つづゝ書き出さねばならぬのであるから、容易ならぬ事業で、たやすく出來そうにも思はれず、多年の懸案ではあるが、拋擲するの外はないやうに思はれ出した。しかし、考へてみると、それも殘念であるし、いろいろ思ひ餘つた末に、第一着手として、「夜明け前」から、素材だけを、摘出するだけのことをやつて見やう。それなら、わずかの時間でも、出來ることであるし、その結果は、それだけづゝ發表することも出來ると考へたのである。以下はそれである。誰か木曾路の交通史を研究してゐる方があつて、この素材を利用したいと考へるなら、利用することは固より隨意だし、わたくしが、將來これを纏めて、木曾路交通史に取入れるかも知れない。またこの素材だけを讀んで、興味を持つ方もあるかも知れない。それ等のことは、わたくしの關するところではない。只便宜のために、頁數を載せて、出所を明にして置く。

第一部

一

（一）名高い棧も、蔦のかづらを頼みにしたやうな、危い場所ではなくなつて、德川時代の末には、既に渡ることの出來る橋であつた。新規に〳〵と出來た道はだん〳〵谷の方の位置へと降つて來た。道の狹いところには、木を伐つて並で、藤づるでかため、それで街道の狹いのを補つた。長い間に木曾路に起つて來た變化は、いくらかづゝでも嶮岨な山坂の多いところを歩きよくした。そのかはり、大雨ごとにやつて來る河水の氾濫が旅行を困難にする。その度に旅人は最寄り〳〵の宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめづらしくない(3)。

（二）馬籠は木曾十一宿の一つで、宿場らしい高札の立つところを中心に、本陣、問屋、年寄、傳馬役、定歩行役、水役、七里役（飛脚）などより成る(3)。

（三）毎年舊曆の三月に、惠那山脈の雪も溶けはじめる頃

になると、にはかに人の往來も多い。中津川の商人は奥筋（三留野、上松、福島から奈良井までを指す）への諸勘定を兼ねて登つて來る。伊那の谷からは、飯田の在のものが祭禮の衣裳を借りにやつて來る。太神樂も入り込む。伊勢へ、津島へ、金毘羅へ、あるひは善光寺への參詣も始つてそれらの團體をつくつて通る旅人の群の動きがこの街道に活氣をそゝぎ入れる(5)。

（四）參勤交代の大小の諸大名、日光への例幣使、大阪の奉行や御加番衆などはこゝを通行した。吉左衞門（筆者註本陣）なり金兵衞（筆者註年寄役）なりは他の宿役人を誘ひ合せ、定紋付の麻の袴を着用して、西の宿境まで一行をうやうやしく出迎へる。そして東は陣場か峠まで見送る(5)。

（五）宿から宿への繼立てと言へば、人足や馬の世話から荷物の取扱ひまで、一通行ある毎に宿役人としての心づかひもかなり多い。多人數の宿泊。もしくは御小休の用意も忘れてはならなかつた。水戸の御茶壺。公儀の御鷹方をも、こんな風にして迎へる。しかしこれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなどに干渉されないで濟む通行である。福島勘定所の奉行を迎へるとか、木曾山一帶を支配する尾張藩の材木方を迎へるとかいふ日になると、たゞの送り迎へや繼立てだけではなか〳〵濟まされなかつた。多感な光景が街道に展けることもある(5)。

（六）天保十年尾張藩主の遺骸がこの街道を通つた時は、同勢およそ千六百七十人ほどの人數がこの宿（筆者註馬籠）に溢れた。問屋から年寄役、組頭から、村中總掛りで事に當つた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは手が足りなくて、千人あまりも伊那の助郷が出た。諸方から集めた馬の數は二百二十匹にも上つた。金兵衞（筆者註年寄役）の住居に二人の御用人の外に上下合せて八十人の人數を泊め、馬も二匹引受けた(6-7)。

（七）時には荒くれた猪が人家の並ぶ街道にまで飛び出す鹽澤といふところから出て來た猪は、宿はづれの陣場から藥師堂の前を通りあばれ廻つて、馬場へ突進したことがある。皆鐵砲を持出して騒いだが、日暮になつてその行方も

分らなかつた。向山から鹿の飛び出した時は、大勢の村の人が集つて、一ト矢で射とめた(7-8)。

二

（八）檜木、椹、明檜、高野槇、檜――これを木曾では五木といふ。巣山、留山、明山の區別があつて、巣山と留山とは絶對に村民の立ち入ることを許さない。明山のみが自由とされてゐる。明山でも五木ばかりは、許可なしに伐採することを禁じられてゐた。これは森林保護の精神より出たことは明かで、木曾山を管理する尾張藩が、材木を重く視てゐたのである。取締りはやかましい。少しの怠りでもあると、木曾谷中三十三ケ村の庄屋は上松の陣屋へ呼び出される。吉左衛門の家は代々本陣庄屋問屋の三役を兼ねてゐたから、その度に、庄屋として、背伐りの嚴禁を犯した村民のため言ひ開きもしなければならなかつた。檜木一本でも、陣屋の役人の目には人間の生命よりも重かつた。

目證（めかし）の彌平は村に滯在して、幕府時代の「おかつぴき」の役目をつとめてゐた。彌平の案内で、福島の役所から役人が來た。その吟味は本陣の家の門内で行はれた。前庭の上段には、福島から來た役人の年寄、用人、書役などが居並んで、その側には足輕が四人も控へた。その上で村中のものが呼び出された。科によつて腰縄手錠で宿役人の中へ預けられることになつた。尤も老年で七十歳以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは「お叱り」といふだけにとゞめて特別な憐憫を加へられた。

この役人が吟味のために村へ入り込むといふ噂でも傳はると、あわてゝ不用の材木を燒きすてるものがある。圍つて置いた檜板を他へ移すものがある。背伐りの吟味と言へば、村中家探しの評判が立つほど嚴重を極めたものだ(8-10)。

（九）浦賀の方に黑船の着いたといふ噂を耳にした。やがて通行の前觸だ。間もなく江戸出府の尾張の家中を迎へた尾張藩主の名代、成瀨隼人之正、その家中の通行の後にはかねて待ち受けてゐた彦根の家中も逈々やつて來る。公儀御茶壺同樣にとの御觸れがあつて、名古屋城からの具足長持が十棹も續いた。それらの警護の武士が連れて來た人足

だけでも百五十人に上つた。馬籠の宿場としては、山口村からの二十人の加勢しか得られなかつた。ある朝馬籠から送り出した長持は、隣宿の妻籠で行き止まり、翌朝中津川から來た長持は、馬籠の本陣の前で立ち往生する。荷物問屋預けとなつたが、人馬繼立の見分として、奉行まで出張して來るほど街道はごたごたした。（未完）

奈良縣の道路愛護

奈良縣土木課

はじがき

本縣に於ける道路愛護運動は昭和八年道路愛護奬勵規程を設け「公共心ヲ涵養シ道路愛護思想ノ普及」を目差して特に愛護デー等を設くることなく不斷の運動を起してより茲に五年昭和十三年中に於ける優良團體の表彰式を三月二十四日縣公會堂に於て多數の來賓を迎へて擧行せり。

愛護團體

愛護團體は愛護精神の普及徹底と縣民の理解により年々隆盛の途を辿り現時戰時下に於ては一段と勤勞奉仕の念に燃へその設立數三二四團體會員數二九、七一一人に及び昨年度に比し團體數三會員數一、〇〇〇人の增加を示せり然して是等團體の維持延長は本縣國府縣道延長の九九%に達するを得たり尙この外國防婦人會員その他にして愛護會員外の就業數相當多數ある見込なり。

作業實績